

外交記録から分かる 光瑞の国際政治社会での活動

中野 照男

二〇一〇年一月に亡くなったミステリ作家北森鴻に、『暁の密使』という歴史ロマンがあることをご存じだろうか。一九〇一年に中国側からチベット入りを目指したものの、そのまま消息を絶った能海寛を主人公にしたものである。親本は二〇〇五年の刊行、現在では文庫で読むことができる。宗教的な使命に燃える主人公は、この作家にしてはやや造形的に物足りないが、それとは対照的に、副主人公ともいえる河口慧海は強烈な個性を示しており、ちょっと辟易させられる。

作者は、彼ら二人の旅程を追うようにみせて、実はチベットをめぐる緊張した国際情勢を面白がっているのであって、そこにサスペンスを盛り上げる書きぶりに、さすが北森、と感心させられたものであった。同様の関心から、チベット問

題を核とする国際政治社会のフィールドのなかに、あの有名な大谷探検隊の活動を置いて、それを学術的に検討してみるとどういうことが分かるか。この、なかなか面白いテーマに挑戦した本が出版された。

大谷光瑞（一八七六―一九四八）が主宰した大谷探検隊といえは、内陸アジアの調査で有名であるが、実は、アジアの広域で多様な活動を行ったことが、近年次第に明らかにされてきた。たとえば、柴田幹夫編『大谷光瑞とアジア——知られざるアジア主義者の軌跡』（勉誠出版、二〇一〇）は、光瑞の活動の総体を、さまざまな研究分野の人たちが、いろいろな角度からアプローチしたものであった。本論集、白須浄真編『大谷光瑞と国際政治社会——チベット、探検隊、辛亥革命』

白須浄真編

大谷光瑞と国際政治社会

——チベット、探検隊、辛亥革命



A5判 406頁

勉誠出版 [5250円]

はその続編とも言えるものであるが、しかし、アプローチの方法が異なっている。国際政治社会から、光瑞の活動はどのように見えるのかを、資料として外務省の外交記録を活用して明らかにするのである。白須は、『大谷光瑞とアジア』に載せた論文「日本国外務省外交記録と大谷探検隊の研究——近八年の回顧と新たな研究フィールドの設定」において、この研究手法の有効性を力説していたが、今回、彼はまさに他の研究者を巻き込んで、それを実行してみせたのである。大谷探検隊の行動が国際政治社会と無関係であるはずがないとは思っていたが、事実は想像以上で、彼らは国際舞台の上で皆の注目を集めていたことが、収録された十

篇の論文から否応なく明らかになった。

本論集は、二部で構成され、第一部は「国際政治社会における大谷光瑞とそのアジア広域調査活動」、第二部は「辛亥革命とチベットと大谷光瑞」と名づけられ、各部に五篇ずつの論文が配されている。第一部には、金子民雄「英露対立から英露協商期における国際政治社会——チベット問題を中心として」、白須淨眞「野村栄三郎による第三次大谷探検隊の消滅と新・三次隊の編成——英国インド政府のカラコルム・パス通過拒否とその余波」、ブリッジ・タンカ（宮本隆史訳）「日本仏教徒の近代的転成——大谷光瑞の中央アジア探検」、奥山直司「青木文教と河口慧海——「西蔵大蔵経問題」、高木康子「大谷探検隊関係入蔵者資料の現状——青木文教資料を中心に」を収める。

金子は、英国インド政府の外交記録を駆使し、英国とロシアの関係が対立期から協商期へと変化したのに伴って、英国のチベット政策がどのように変化したかを丹念に追い、それが光瑞や野村栄三郎、橋瑞超の活動に及ぼした影響を示唆

した。白須の論文は、金子の論文を受けたものである。彼は、英露が協調し、チベットに対して互いに政治的に不干渉であるうと申し合わせたことによって、英国側の眼には、光瑞たちの行動が政治的なものと映り、不信を募らせていったこと、そのために野村が申請したカラコルム峠の通過が拒絶されたことなどを、外務省の外交記録によって明らかにした。

ただし、橋が地理学の学術雑誌に予告した第三次探検隊の行動予定が、実際の行動とはかけ離れたものであったことなどを指摘し、光瑞の側にも政治的な意図を持っていると疑われても仕方がない状況があったことも示した。ブリッジ・タンカは、大谷探検隊の行動を、仏教教団による社会変革、社会の近代化と位置付け得ることを、宗教史研究の側面から指摘した。奥山直司の論文は、「大正の玉手箱事件」と呼ばれるものを扱っている。河口慧海が持ち帰ったチベット大蔵経のなかに、実はダライラマ十三世が光瑞に贈呈したものが含まれているのではないかという問題について、青木文教と河口

慧海の間で交わされた論争の経緯を、当時の新聞記事を基本的な資料として追及し、新しい見解を示したものである。高木康子は、青木文教が将来したチベット関連資料を丹念に整理し、その現状、たとえば内容や所蔵先等について報告している。

第二部には、柴田幹夫「辛亥革命と大谷光瑞」、加藤斗規「辛亥革命期、清国留学生盛先覚と大谷光瑞の会談について——ダライラマ十三世「帰蔵」問題と「五族共和」論に関連して」、白須淨眞「外務本省に提出された西蔵問題に係わる一報告書——一九一二年（明治四十五）？二月十三日、西本願寺が提出した報告書の紹介とその解説」、高木康子「明治日本と「喇嘛教」——北京雍和宮活仏阿嘉呼图克図の来日を中心として」、白須淨眞「ダライラマ十三世による明治天皇への上書・献納品謝絶の顛末——「自明治四十五年（一九一二）至大正六年（一九一七）、西蔵・達頼喇嘛ヨリ我皇室へ献納品謝絶一件」と題された外務省外交記録の紹介と解説」の五篇を収める。

柴田幹夫は、辛亥革命に際して、光瑞が発した指令、西本願寺が行った救護活動などについて、「教海一瀾」などの新聞記事を丹念に調べ、光瑞が革命の両勢力と積極的に関わったことよって、結局、革命後の中国の政局に対して発言力を得たことを描きだした。辛亥革命がチベット問題に繋がるとは思いもしなかったが、中国の政治体制がダライラマの思惑や動向に影響を与えることから、ダライラマと親しい光瑞も否応なく巻き込まれてしまう様子がよく分かった。加藤斗規は、内藤湖南の著作にその名が見える、中国からの留学生の盛先覚が、光瑞を紹介してダライラマ十三世に接触したいと考え、光瑞と下関で会談する顛末を紹介する。辛亥革命以後のチベットのありように関わる光瑞の意図、ダライラマの帰蔵による光瑞の失望など、面白い事実が明らかにされている。白須淨眞の第二の論文は、光瑞が、自らのチベット問題への関与を外務省に報告した文書に関わる一連の史料を紹介し、解説を付したものである。内容からみて、オリジナルは光瑞

が作成したものに違いない。外交記録を資料として扱う研究手法のサンプルにもなっている。高木康子の第二の論文は、北京雍和宮の活仏である阿嘉呼図克圖（アキャフトクト）の来日の顛末を明らかにし、その折の仏教界の対応の構図が、のちに大谷尊由（光瑞の弟）らが五台山においてダライラマ十三世と会談した折にも引き継がれていることを示した。白須淨眞の第三の論文は、ダライラマ十三世が河口慧海に託して、チベットの金銅仏などを皇室に献上しようとした時に、日本の外務省がそれを謝絶した事件を取り扱ったものである。扱った外交記録の中には、先の奥山論文を補足するものも見られる。チベット問題に対する日本政府の態度や、光瑞の慧海に対する評価がうかがわれるのも興味深い。以上が第二部の構成である。各論文は、巧みに連関し、呼応しあっており、白須の構成本力には脱帽するしかない。

白須が、柴田とともに、光瑞に関わる外交記録を見出したのは、二〇〇一年のことであるという。それ以降、白須は外

交記録を活用した研究を積極的に進め、その成果の発表に努めている。外務省の外交記録と英国インド政庁の外交記録を併せて活用することによって、光瑞と大谷探検隊の研究は新しい段階に入ったと言えようか。そして、国際政治社会の中に探検隊の活動を正当に位置付け、それを評価することは大変に意義深いということを書きよって確かに気づかされた。

国際政治社会のなかで大きな足跡を残した光瑞は、一九四八年、大分県別府市の鉄輪にて示寂した。現在、本願寺別府別所に大谷記念館が設けられ、光瑞ゆかりの法衣や法具、遺品などが展示されており、少し離れた大谷公園には、一九九七年、光瑞の五十回忌を記念して、光瑞および探検隊員たちを顕彰する碑が建てられた。確か、碑文は白須によるもので、光瑞たちに寄せる白須の深い思いが、しみじみと伝わるものであった。

（なかのつるお 東京文化財研究所）

